
魔法老婆 うめこ マギカ

まどろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法老婆 うめこ マギカ

【Nコード】

N9675Z

【作者名】

まどろみ

【あらすじ】

魔法少女ばかりにスポットが当てられ、魔法おっさん、魔法老婆、魔法オカマ等が忘れられている世の中。魔法おっさん、魔法オカマは書けないけど、魔法老婆だったら書ける！！魔法老婆の魅力を書こうではないか。っていう感じのお話です。

キユウベえ、頑張る（前書き）

勢いで書いた。

反省はしているが、後悔はしていない。

キュウベえ、頑張る

「僕と契約して魔法少女に……」

キュウベえが途中で言葉を止めてしまったのも仕方ない。

皺々の手。真っ白な髪。

どこをどう見ても、少女と言うには無理があった。

どれほど、お世辞を駆使したとしても、キュウベえのもつ話術を駆使したとしても、彼女を少女と称する事が出来なかったのだ。

一体、上は何を考えているんだろうか？

エントロピー云々のためには、少女という感情の上下が激しいエネルギー源のほう効率的なのだ。

目の前を見してみる。

老婆だ。

「……僕と契約して、魔法老婆になってよ」

さて、ここで一つ問題が発生するのだ。

もし仮にだ。

仮にこの契約がなったとしよう。

魔法少女のコスチュームというのは、総じて可愛らしく、ちょっとばかり露出度が高いものが多い。

それをだ。

それを、彼女、山田 梅子に着せるといふ暴挙は大きすぎる問題であらう。

杖を持ち、「リリカル むにゃむにゃ」などと、もし唱えたら暴動が起きる。

キユウベえは感情が無いから大丈夫……なのだろうか？
好奇心が湧く議題だが、リスクが高すぎる。

「えーと、聞こえてる？

僕と契約して、魔法老婆になってよ」

どうやら、キユウベえは吹っ切れたらしい。
たくましく、勧誘が続けているのだ。

「ああ、貴子さん。

今日はいい天気ですねえ」

「う、うん、いい天気だね。

あと、僕貴子さん？じゃなくてキユウベえっていうんだ」

「そうですねえ、貴子さん

お昼まだなんですよ」

ちなみに、もう夕方である。

「いや、僕は貴子さんじゃなくて」

「いい天気ですねえ」

「う、うん、いい天気だね」

ある意味キュウベえにとつての天敵といっていい存在だった。
キュウベえが得意とするのは、話術や自分には分かりもしない感情
とやらの訴える物なのだ。

それが、全く出来ないのだ。

「じゃ、貴子さん

料理お願いしますね」

「……え？」

「ワケが分からないよ。

本当にワケがわからないよ。」

本当であれば、コレをお願いとし、梅子さんを魔法老婆にしてしま
うつもりだったのだ。

だが、いかんせん幾つもの問題がある。

1つ、ただのお願いであり、代価として魔法老婆になると明確に言
っていない。

2つ、会話が成立していない。

3つ、そもそも、キュウベえと貴子さんなる人を間違えている。
4つ、あれ？これ無理じゃね？

である。

そのお願いなど、無視すればいいのだが、料理を作らなかった事によって、この老人が飢えて死んでしまうという可能性が少なからずあるのだ。

この豊かな国では、ほとんど無いとはいえ、可能性が0というわけではない。

魔法老婆になるまえに、死なれては困るのだ。

それで、適当な物でも渡そうかとしたのだが、それにより身体に^{ジャンクフード}変調をきたす可能性も考慮しなくてはならない。

なにせ相手はお年寄り、食事には気を使わなくてはならない。

餅等を喉に詰まらせ無くなる、というのも非常に多いのだ。

そうになると、出来るだけ健康的な料理、つまり手作りのものとなつて来る。

身体が見えない、というよりそもそも4本足であるキュウベえにとつてコレほど難易度の高い問題を取り扱った事などなかったのだ。

案外何とかなったが……

だが、キュウベえの戦いはまだまだ始まったばかり。

たかが食事など四天王の中でも最弱。

浴槽、トイレ、洗濯。が待っているのだ。

頑張れ、キュウベえ。
負けるな、キュウベえ。

果たして、キュウベえの営業は成功するのだろうか？

「貴子さんや、いい天気ですねえ」

「う、うん、いい天気だね」

キュウベえ、ひらめく

「そうか、答えは簡単だったんだ」

梅子（８８歳）との契約という無理難題を上から命じられ早３ヶ月目。

だんだんと、料理の腕前が上がってきた頃にようやくキュウベえは梅子との契約方法を思いついたのだ。

「僕が貴子さんになれば良いんだ!？」

３ヶ月もの間、考えた結果だったのだ。

彼が梅子との契約がなせなかった理由は以下の通りである。

- １つ、ただのお願いであり、代価として魔法老婆になると明確に言っていない。
- ２つ、会話が成立していない。
- ３つ、そもそも、キュウベえと貴子さんなる人を間違えている。
- ４つ、あれ？これ無理じゃね？

以上の４つによつて彼は契約出来なかったのだ。

だが、だ。

だが、キュウベえが貴子さんとなつたらどうだろうか？

一気に話の一貫性がとれ、契約することが出来るのだ。

もちろん、やっている事は詐欺その物。許されざる行為ではあるのだが、その辺を華麗にスルーするのがキュウベえなのだ。

「という訳で、僕は今から貴子さんだ」

堂々と梅子に宣言する。

なお、『この』キュウベえを認識しているのは梅子以外居ない、という点から考えるに梅子本人が了承したらキュウベえという存在が貴子さんなる存在になりえる。

とか、良くワケの分からない言い訳がキュウベえの頭の中で渦巻いているのだが、それはどうでもいいので略。

「はいはい、分かりましたよ」

梅子の上承を取ることも完了した。
これで、ようやく契約出来るのだ。

キュウベえ、改め貴子さんは感情のなくせに感涙しそうになっていた。

たった3カ月とはいえ、彼にとって苦勞の連続。

四本足だというのに、料理をしたり、浴槽の準備、梅子が足等を滑らせない様に、見張り。

転びそうになった時は、その身を犠牲にし、助けたのだ。

だが、ようやくその苦勞も終わる。

「じゃ、梅子。

改めて言つよ。僕と契約して魔法老婆になろうよ」

今までの苦勞を噛み締めながら、キュウベえは吐き出すように言った。

これで、もし何か適当な言葉。

例えば、『貴子さん、料理をお願いしますね』等の言葉でも、契約をするから、代わりに料理をしてくれという意味に歪曲して理解する事も不可能ではない。

明らかに、意思の疎通が出来ていないが、キュウベえの中ではOKなのだ。

「料理、お願いしますね」

勝った……

ついに、キュウベえは勝ったのだ。

100を超え、数えるのをやめた「ワケが分からないよ」もこれ以上言わなくてもすむのだ。

感情がないはずのキュウベえの胸の内に宿る、達成感にも似た何か

……

それを噛み締

「ジョセフィーヌさん」

「なん……だと……」

感情を知らないキュウベえは気付かない。自分が安堵している事に。

「よろしくね。

キュウベえ」

「…………え？」

振り向くと、ニコニコしている梅子の顔が見えるだけだ。

「梅子、今僕の名前を…………」

梅子はニコニコと笑みを浮かべたながら、キュウベえを見つめるだけ。
け。

キュウベえは首を傾げながら台所へと向かうのだった。

まだまだ、今日は始まったばかり

頑張れ、キュウベえ。
負けるな、キュウベえ。

キユウベえ、ひらめく(後書き)

めっちゃ勢いで書いてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675z/>

魔法老婆 うめこ マギカ

2012年1月8日22時45分発行